

内村鑑三の天然観

——無教会主義からの考察——

住 恵美

はじめに

環境問題への積極的参画が求められるようになって久しい。1972年にストックホルム会議¹にて「人間環境宣言」が採択された後、官民一体となった天然資源への改善行動が求められている。

今日、様々な場所で、地球環境に配慮した事業や活動が行われているが、ただアクションすることが目標となり、ゴールに到る道筋から逸脱しつつあるように感じる²。目的達成のために熟考することなく、世情に鑑みて取りあえずやってみるという行動の先に、果たして目指した理念があるのかは疑わしく、改めて「熱烈ではあるが冷静な精神と、強烈ではあるが秩序だった作業」³が求められる。

そこで今回は、思想分野から天然のあり方を学ぶ。特に日本思想史の中で、天地万物に対する特異な解釈を遺した内村鑑三の「天然観」について、キリスト教解釈の一つである「無教会主義」を手がかりに考察し、これか

¹ 国連として初めて環境問題が主題となった会議。同会議で採択された「人間環境宣言」は、天然資源に対する初の一般通念であり、その原初的意味合いから環境問題を議論する上で、無視できない理念となった。環境省「環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書」<https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/r06/index.html>（最終確認：2025年1月25日）。

² 例を挙げると、スターバックスコーヒーにおける、紙ストローの導入がある。既存のプラスチックストローを廃止し、紙で出来たものを使用することで「サステナブルな未来につながる」と謳っているがSNS上では口当たりが悪い、ふやけて飲みにくいなどの否定的な意見が散見される。環境問題を論じる上で重要な点は、地球と人類が共存する道筋を模索することであり、その先に、今よりも豊かな未来を思い描けるかどうかを舵取りの指針であるように思われる。そのため、環境を慮った活動が人類の文化レベルを引き下げることなどがあってはならず、スターバックスコーヒーの紙ストロー導入には、省察と改良が必要であるように感じる。

³ 環境省「国連人間環境会議（ストックホルム会議：1972年）」https://www.env.go.jp/council/21kankyo-k/y210-02/ref_03.pdf, 2頁（最終確認：2025年1月25日）。

らの自然環境との向き合い方を考えたい。

1. 内村思想の鍵語

(1) 内村の神概念

まず、最初に「空ノ鳥ト野ノ百合花」という演説から、内村の造化への立場を見る。

我等造化ノ美妙ヲ見ルニ唯ニ其美ヲ觀ルニ止マラズ桜花ヲ見テ喜
ビ雲雀ノ声ヲ聞テ樂シム是レ不信徒モ尚ホナス所ナレドモ信徒ハ造
化ヲ觀テ造化ニ止マラズ当サニ造化ノ神ヲ見ルニ至ルベキナリ⁴

この文をまとめると、内村は天然を通じて神の御業に触れることが、伝統的な日本人の「自然」そのものに神を見出す考え方と異なる点だと主張している⁵。では具体的にどのように違うのか、内村の抱く神概念について考察していく。

内村の神に関する思想は「無神論」⁶と「有神論」に大別することが出来、さらに後者は「万有神教 (Pantheism)」、 「自然神教 (Deism)」、 「唯一神教 (Theism)」の三派に細分化される。

有神論についてそれぞれ見ていくと、一つ目の「万有神教」とは、主は「宇宙と共に在り、宇宙の中に在る」⁷とする神観である。これはあらゆるものに靈魂を見出すアニミズムとは異なり、全ては一つの精神的本質によって統一されていると解釈する。万有神教の特徴的な点は、神と宇宙の関係性は「造物主と被造物」⁸ではなく「靈と肉」⁹であり、主の意図はその身

⁴ 内村鑑三 (1990年) 『内村鑑三選集第五卷』岩波書店、15頁。

⁵ 鈴木範久 (1975年) 『内村鑑三とその時代—志賀重昂との比較』日本基督教団出版局、184頁。

⁶ 内村は無神論の定義について、「読んで字の如く神は無いと云ふ説である、即ち万物の起源と其持続とを神 (靈) 以外の力に帰せんとする説である」としている。しかし「人自身が靈的存在者」であるため、無神論は不可能だとしている。内村鑑三 (1982年) 『内村鑑三全集 17』岩波書店、101頁。

⁷ 内村鑑三 (1983年) 『内村鑑三全集 32』岩波書店、178頁。

⁸ 前掲書、同頁。

⁹ 前掲書、同頁。

体である宇宙を通じて我々の目に映る。この点において「我等が普通宇宙と称するものは、神の物的半面に過ぎない」¹⁰のだ。

内村は万有神教に関し、その単純明瞭な構図から「由て説明し能はざる事実としては一つも無い」¹¹と評価しているが、全てに主を見出すため、「万物の価値が上ると同時に神の価値は下が」¹²り、その神性は自然の中に取り込まれ「神は無きに等しくなる」¹³と述べている。

二つ目の「自然神教」は、神を宇宙の外に置くという特徴がある。宇宙は神によって完全な形で成っており、役割を終えた主は宇宙の外側から人類を見守っていると解釈する。そのため宇宙には欠けたる部分がなく、万物は神より離れ「独り自から完全を目指して発達」¹⁴を続けるのだという。

このようにあらゆるものが神の完全なる道理を反映しているため「天然を通して天然の神に到る」¹⁵という直接的な信仰態度を取ることとなる。この点に関して内村は、主が「万物の中心」¹⁶であるという意味において、キリスト者も概ね「自然神教信者」¹⁷であるが、完全なる宇宙に依然として悪事や犯罪など「人生の大事実なる罪」¹⁸がある理由を説明することは出来ず、またそれを取り除く方法も明らかではないため、「自然神教は神に関する不完全なる見方である」¹⁹と指摘している。

そして最後の「唯一神教」は、前者二つの間に立ち「真理を綜合する者である」²⁰としている。宇宙は神によって創造されたが未だ完成しておらず、今なお主は「宇宙の中に在りて造化の活動」²¹を続けているのだという。また神は宇宙の中に留まってはいるが、そのスケールに収まることは

¹⁰ 前掲書、同頁。

¹¹ 前掲書、179頁。

¹² 前掲書、190頁。

¹³ 前掲書、180頁。

¹⁴ 前掲書、178頁。

¹⁵ 前掲書、175頁。

¹⁶ 前掲書、同頁。

¹⁷ 前掲書、同頁。

¹⁸ 前掲書、176頁。

¹⁹ 前掲書、同頁。

²⁰ 内村鑑三（1982年）、104頁。

²¹ 前掲書、同頁。

ない。「宇宙は大なりと雖も神は宇宙よりも大である」²²のであり、「常に神より力の注入を受けて其成長発達」²³を続けているため草木を以て神の御業を見ることはあってもその力の一端に過ぎないのだ。

以上を念頭に置いて先の文章を振り返ると、内村は日本の神道に見られるアニミズム的要素を考慮することなく、天然との交流を通じて神に到る道を説いていることが分かる。風光明媚な景色や生物の美しい体軀には、確かに大いなる存在の影を感じる事が出来る。しかしながら、それは神の御業を示す一部に過ぎず、その先にある主の計り知れない御心に耳を傾ける姿勢を説いたのだ。

これらをまとめると、天然には壮大な原始的風景から感じ取られる、万物を生み出した神の偉大さや神秘性を賛美する思いが込められており、それら自己以上に昇らしむる世界の美しさを通じて、神の御業に感じ入るといった思想が形成されたことが分かった。そのような内村独特の自然解釈である「天然」が具体的な形を成したものが「無教会主義」である。

(2) 無教会主義

内村の思想を読み解く際に、「無教会主義」という言葉は外すことが出来ない。字義通りに解釈すれば、non-church（教会がない）となるが、内村のいう無教会とは、既存の在り方を越えた存在、beyond-church（教会を越えた教会）を指す²⁴。

無教会主義をひも解くためにはまず不敬事件²⁵について知る必要がある。

²² 前掲書、同頁。

²³ 前掲書、同頁。

²⁴ 若松英輔（2018年）、209頁。

²⁵ 内村は札幌農学校を卒業後、北海道開拓の任に就くがその後退職し、アメリカへの留学を経て1890年第一高等中学校の教員に着任する。その同年に明治天皇の署名を付した「教育に関する勅語」いわゆる教育勅語が發布され、学校で拝読式が執り行われた。現人神である天皇が署名した勅語もまた畏敬の対象であり、「低頭奉拝」する必要があったが、内村は神への信仰心から逡巡し、その態度が天皇に対して不敬であると取られた。これに端を発したのが「不敬事件」である。内村は事件後心身への疲労からインフルエンザに罹患し、献身的に看病した妻のかずはその後亡くなってしまった。また、内村の知らぬ内に辞表届が提出され職も失ってしまうなど、大きな苦しみを経験することとなる。

詳細は注釈を参照いただきたいが、要約すると天皇の言葉を記した勅語に畏敬の念を込めた低頭をしなかったことが、日本人にあるまじき行為として解釈され、大きな騒動を生んだというものである。事の收拾を図るため勅語への低頭を、国体への敬意の表現であるとして再拝をする²⁶と、今度はキリスト教会側から二律背反な態度であるとして糾弾されてしまう。

内村は日本人から目の敵にされただけではなく、地上の天国²⁷と表現し心の拠り所としていた教会からも追放されてしまうのだが、これを契機に内村の教会への理解が大きな転換を見せる。世界そのものを広大無辺な教会として解釈するようになるのだ。

余は無教会となりたり。人の手にて造られし教会は、余は今やこれを有するなし。余を慰むる賛美の声なし。しからば余は神を拝し神に近く為の礼拝堂を有せざるか²⁸。

このような文が続く。夕日に照らされた雲に己の心を映す時、一人歩きながら今は亡き聖人と心の中で対話する時、そこには声にならない「声」による無音の説教²⁹が響き渡る。

批評家の若松英輔によると、内村は教会を霊交の実現する場所³⁰、すなわち神を求める心と心が互いに交際し、大いなる存在へと繋がる道を模索する空間として捉えた。したがって宇宙を構成する万物いわゆる「天然」と、時間軸を超えた聖人との交わりに新たな居場所を見出したのである。

しかしこの言葉は誕生と同時に大きな矛盾を抱えることとなる。順を追って見ていく。神学者の赤木善光によると、内村自身は無教会主義について、既存の「人工的」³¹教会と一線を画すものとして「天然に直結するキ

²⁶ 内村はインフルエンザで生死の境を彷徨っていたため、実際には内村を第一高等学校へ推薦した木村俊吉が行った。前掲書、72頁。

²⁷ 鈴木範久（1975年）、47頁。

²⁸ 内村鑑三（2021年）『キリスト信徒のなぐさめ』岩波書店、65頁。

²⁹ 若松英輔（2018年）、20頁。

³⁰ 前掲書、23頁。

³¹ 赤木善光（1993年）、163頁。内村は既存の教会制度そのものを否定した訳ではない。神の意図が記された聖書から第一に学ぶのではなく、人間の作った教派の教えや

リスト教であることを主張した」³²が、同じく人の手で作られたものである限り、教会の枠組を脱することは出来ず、それに向けて「志向しているにすぎ」³³ないという。

たとえ「無」を冠しても「あくまでも地上の宗教集団のひとつのあり方」³⁴を超え出ないことについて、実は内村自身も肯首しており、日記にはその胸中が綴られている。

無教会主義は此世に於いて実行不可能の主義である。若し実行可能ならば直に教会と成りて実現する。無教会主義の尊さは其実行不可能なるに於てある。不可能を実行せんと努力奮闘する所にキリストの教の尊さがある³⁵。

このことから内村にとって重要なことは、無教会主義が広く人々に受け入れられることなどではなく、自身の掲げた信念によって、神の国に至る道を模索し続けることであったのだと考えられる。

では神の勝利のため、内村がその信条を以て努力奮闘したことは何か。それは「天と地とその中に存するものに現れたる神の聖旨」³⁶、つまり天然から見出した神の御業を、主の教えが記された聖書の研究を通じて人々に伝道することであった。内村はこのような言葉を遺している。

天然は神に非ず、然れども靈妙不思議にして、人の量知る能はざる者である。然らば天然は何である乎。神が御自身を現はさんとして造り給ふたる者である³⁷。

儀式、祭礼を介して神の御業に触れるという間接的な信仰態度に異を唱えたのである。

³² 前掲書、同頁。

³³ 前掲書、同頁。

³⁴ 前掲書、162-163頁。

³⁵ 内村鑑三（1983年）『内村鑑三全集 35』岩波書店、510頁。

³⁶ 山本泰次郎（1965年）、249頁。

³⁷ 内村鑑三（1982年）『内村鑑三全集 28』岩波書店、90頁。

内村は、神の御業が働いている天然を通じて主の大いなる息吹を体感し、その教えが刻まれている聖書³⁸について研究することで、偉大なる国への道程を歩もうとしたのである。次の章では内村が聖書において、天然をどのように解釈していたのかをひも解いていく。

2. 聖書からの考察

(1) 『創世記』「天地創造」

内村が聖書の中でも特に強い関心を寄せていたのは、世界の創造が記された『創世記』であり、内村曰はく

聖書は創世記に始まり、黙示録をもって終わっている。創世記は天地創造の記録、黙示録は天地完成の記録である³⁹。

という。本稿ではその内の第一章「天地創造」から、内村の「天然観」を具体的に見ていく。

その特徴的な点は「天地創造の目的は人類の完成」⁴⁰にあり、「地は人類のすみかとして造られた」⁴¹という捉え方である。「聖書は人類救済の歴史」⁴²を記していると考えた内村は、人を離れて聖書を論じることが無かった。そのため天然と人を位置付けて捉えると、人類救済の土俵として「太初(はじめ)に神、天地を造りたまえり」⁴³という理解になるのだ⁴⁴。

では内村は、その中において人をどのように解釈したのだろうか。神に

³⁸ 内村は聖書を、神が人々を救済するために施したことの記録書であると考え、他に類を見ない偉大さを記す「世界唯一の書」であると考えた。山本泰次郎（1965年）、8頁。

³⁹ 前掲書、7頁。

⁴⁰ 前掲書、23頁。

⁴¹ 前掲書、同頁。

⁴² 前掲書、22頁。

⁴³ 前掲書、同頁。

⁴⁴ 内村は天地創造について、科学的研究をする必要はないと説いている。創世記は人類救済の立場から見た宇宙観であるため、聖書的に解釈しなければならないと考えたのだ。かく言う内村自身は、科学者として天文学、地理学、生物学等にも造詣があった。前掲書、22頁、253頁。

よる六日間の創造から読み解く。内村はその期間を前後三日に分割し、前半を混沌状態から世界が整えられた判別の時期、後半を生物が生み出された充実の時期として考えた⁴⁵。ここでは人の誕生が描かれた、後者の第六日目に焦点を当てて見ていく。そこでは家畜、昆虫、地上の動物が造られた後、神の姿に倣った人間が他の被造物の支配者として創造されたと記されている。

【創世記 1. 24-31】

神言たまひけるは地は生物を其類に従ひて出し家畜と昆虫と地の獣を其類に従ひて出すべしと即ち斯なりぬ。神地の獣を其類に従ひて造り家畜を其類に従ひて造り地の諸の昆虫を其類に従ひて造りたまへり神之を善と観たまへり。神いひ給ひけるは我儕に象りて我らの像のごとくに我儕人を造り之に海の魚と天空の鳥と家畜と全地と地に葡ふ所の諸の昆虫を治めしめんと。神その像の如くに人を創造給へり即ち神の像の如くに之を造り之を男と女に創造たまへり。神彼等を祝し神彼等に言たまひけるは生よ繁殖よ地に満盈よ之を服従せよ又海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸の生物を治めよ。神いひ給ひけるは視よ我全地の面にある実のなる諸の草と核のある木菓の結る諸の樹とを汝等と与ふこれは汝らの糧となるべし。又地の諸の獣と天空の諸の鳥および地に葡ふ諸の物など凡そ生命ある者には我食物として諸の青き草と与ふと即ち斯なりぬ。神其造りたる諸の物を視たまひけるに甚だ善りき夕あり朝ありき是六日なり。

宗教学者の岩野祐介によると、内村は主の姿に倣った「神の像」としての人類に着眼点を置き「人間と宇宙、そして神の間に連続性がある」⁴⁶ことを強調するという。以下、引用する。

神の像とは如何なるものぞ、神に実に像あるや、神は靈にして、

⁴⁵ 前掲書、31頁。

⁴⁶ 岩野祐介（2013年）『無教会としての教会』教文館、78頁。

像なきものならずや（中略）神に像なしとならば宇宙は何物なるや、是れ神の軀軀にあらざるか（中略）人は小天地なりと云へば天地は人の巨大なるものにあらざるか（中略）若し此無辺の宇宙にして神の像なりとせば余は其説を拒むを好まず（中略）宇宙の宇宙たるは其部分は総て能く其部分を代表するにあり⁴⁷。

内村にとって人間とは、「本来その身体、肉体においても、神と通ずる神聖なもの」⁴⁸であったと岩野は指摘しており、西洋では伝統的に「克服すべき悪しきもの」⁴⁹と見なされてきた自然の要素⁵⁰は、その思想の内に見当たらないという。以上から内村は、内面性や靈性において神に近い人間の優越性を認めていることが窺えるが、その結果としての行為が決して搾取であってはならないとも説いている⁵¹。

「諸ての生物を治めよ」、之を汝の属として利用するのみならず、是れ皆な神の造り給ひしものなれば之を保護し、其発達を助け、其生活をして可丈丈け快樂ならしむべし之を愛して之に就いて学べば物として宇宙の大真理を吾人に伝へざるはなし⁵²。

「之を服従せよ」、服従は此場合に於ては開拓の意なり、荒野を變じて田園となせよ、地の与へ得る総ての産物を得よ、但し之を卑賤なる肉慾のために消費する勿れ、且つ神の給ひし地を利用すると同時に其森を剥ぎ、其地を枯らして、造化の目的を妨ぐる勿れ⁵³。

⁴⁷ 前掲書、同頁。

⁴⁸ 前掲書、同頁。

⁴⁹ 前掲書、同頁。

⁵⁰ キリスト教ヨーロッパ世界では、神・人・自然は階層的に分裂し、人間と天地万物は、主によって独立に創造されたものとして理解された。そのため人間は自然を上から臨み、支配するものとして捉えるようになったという。伊東俊太郎（2002年）『文明と自然』刀水書房、174頁。

⁵¹ 前掲書、79頁。

⁵² 前掲書、同頁。

⁵³ 前掲書、同頁。

内村は「天地創造」を読み解く際に、その造化の「順序」に注目する。神による創造の最終目的は、順序を辿ると「人の出顕とその完成」⁵⁴にあることが分かる。内村によれば、天然の統治者すなわち「主人公」として生み出された人間には、神が人類救済のために創造した万物を守り育み、その発達を助ける責任があり、これらから学びを得ることによって、神の国へ至る道筋を掴めるという。

世界には神の神秘が秘められていると悟った内村が、その御業を垣間見るために天然と真摯に向き合っていたことが窺える。では次に、パウロの記した『ローマの信徒への手紙』いわゆる『ロマ書』を用いて、内村の天然に対する姿勢を深掘りしていく。

(2) 『ロマ書の研究』「天地のうめきとその救い」

全十六章から成る『ロマ書』は、内村曰はく「新約聖書の中心」⁵⁵的役割を担っており、中でも第八章は神による「恩恵」を記している点において、重要視すべき箇所であるという。ここでは、第十八節～二十二節に対する約説「天地のうめきとその救い」を考察していく。

『ロマ書』の執筆者パウロによると、キリストを信じ「罪と死」⁵⁶を免れる「神の子」⁵⁷は主より「ある実物を賦与」⁵⁸される「世嗣」⁵⁹でもあるという。その与えられるものとは、「改造せられたる宇宙—全世界万物」⁶⁰であり、神によって完全な形と成った宇宙の「主人公となる」⁶¹ことこそ、「クリスチャンを待つところの最大の榮譽」⁶²、救済であるという。

前述したように、天地は人類を救うために創造され、人間がそれらを信

⁵⁴ 山本泰次郎（1965年）、25頁。

⁵⁵ 山本泰次郎（1962年）『内村鑑三聖書注解全集第十七巻』教文館、7頁。

⁵⁶ 前掲書、8頁。

⁵⁷ 前掲書、8頁。人類すべてが「神の子たち」だという訳ではなく、主の恩恵を信じる者だけが救いを得ることが出来、それ以外は「ただの人の子—人間である」としている。

⁵⁸ 前掲書、9頁。

⁵⁹ 前掲書、同頁。

⁶⁰ 前掲書、同頁。

⁶¹ 前掲書、同頁。

⁶² 前掲書、同頁。

仰の力を以て統治することで、神の大望は達成されるのである。これに関して内村は、「人類の抱き得る思想にしてこれ以上に出づることはとうていできない」⁶³偉大なものであると評価している。

また、パウロは、大いなる救済の準備期間として、「苦しみ」を耐え抜く日々が伴うことも記しており、それは同時に人類と「運命を同じゅうする」⁶⁴所の「被造物」が呻きの声を上げることでもあるという。以下、聖書より引用する。

【ローマの信徒への手紙 8. 19-22】

それ造られたる者は切に慕ひて神の子たちの現れんことを待つ。造られたるものの虚無に服せしは、己が願によるのみならず、服せしめ給ひし者によるなり。然れどなほ造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの光栄の自由に入る望は存れり。我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。

ここでの「造られたる者」とは何を指すのかについて、内村は「神の子たち」と対立するように用いられている点に着目し、人類を除く宇宙万物すなわち「天然」であるとしている。天地万物が虚無に服する「滅亡の僕」に甘んじている根拠を、内村は「創世記」三章十七節—十八節に見出して、「地は人と運命を共にせしめられた」⁶⁵呪われし状態にあるという。しかしこの悲運は天然に依るのではなく、「人類墮落に起因を發して」⁶⁶神が意図したものであるため、天地万物は苦しみ呻きながらも「神の子たちの栄化と共にみずからもまた復興完成せんことを切に望んでいる」⁶⁷のだ。内村はパウロに賛意を示し、このように述べている。

⁶³ 前掲書、同頁。

⁶⁴ 前掲書、53頁。

⁶⁵ 前掲書、56頁。

⁶⁶ 前掲書、52頁。

⁶⁷ 前掲書、同頁。

彼は心を潜めて天然のうめきの声を聞き、その悲惨なる実状を痛感し、その復興完成の望みを高調する。実に宇宙万物の代弁者なるがごとくに、彼はここに切々たる呻吟翹望（しんぎんぎょうぼう）の歌をかなでたのである⁶⁸。

天然は一見美しくみえるが、一步深くその奥に入れば「醜怪，混乱，残害，争鬪」⁶⁹の坩堝であり、「恐ろしき生存の戦い，殺伐なる弱肉強食」⁷⁰が絶え間なく行われている。また神により創造された豊富なる天然資源を、人間は己が利欲のためだけに濫用し、「自然界を征服すると称して，破壊しつつ来たりしことは，あまりに明瞭なる事である」⁷¹と内村は嘆息する。岩野によると，人間の利己的な振る舞いは神から離れたことに起因する「罪」の結果であると内村は考えたという⁷²。

だが強い語気で「人に天然を支配する力あることは事実」⁷³であると内村は断定している。全能の神が造りあげた宇宙万物の根底には、「今なお復興の力が潜んで」⁷⁴おり，その御業によって人間と天然の真性を呼び起こし，人類救済という目的を遂げるというのである。

結論

本稿では全三章をかけて思想家内村鑑三の「天然観」をひも解いてきた。それらから考察すると内村の天然観とは，信仰の力を用いて天地万物を豊穰の地へと導き，その結果としての主による人類救済を希求することであると考える。唯一神から成る宇宙「天然」を据え，人類が信仰心によりそれらを統御することで永遠の救いを得られると考えたのだ。

⁶⁸ 前掲書，53頁。

⁶⁹ 前掲書，54頁。

⁷⁰ 前掲書，同頁。

⁷¹ 前掲書，55頁。

⁷² 岩野祐介（2005年）「無教会主義キリスト教における社会正義：内村鑑三の社会正義とキリスト教思想の関連を中心に」『アジア・キリスト教・多元性』第3号，6頁。

⁷³ 山本泰次郎（1962年），同頁。

⁷⁴ 前掲書，同頁。

では我々は内村の抱いた天然観を、現代社会においてどのように活用することが出来るだろうか。昨今の環境問題に関する具体例に「SDGs」⁷⁵を取りあげる。このフレーズの名の下、日本中の至る所で「環境に配慮した」いわゆる「持続可能な取り組み」が実施されていることは言うまでもない。

様々な要因が複雑に絡み合う物事を無理無体にかテゴライズして、一側面にのみ焦点を当てたこのような施策は、その裏に隠された他の実状を覆い隠してはいないだろうか。あらゆる事象は多面的なのであり、様々な角度から現象を捉えなければ大きな見誤りを引き起こすだろう。

例として、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」前文から「地球」についての項目を引用する。

我々は、地球が現在及び将来の世代の需要を支えることができるように、持続可能な消費及び生産、天然資源の持続可能な管理並びに気候変動に関する緊急の行動をとることを含めて、地球を破壊から守ることを決意する。

声高に宣言されてはいるが、予測困難な時代推移を「持続可能」の一言で押し量ることが出来るのかは疑問を感じるし、「需要」がないと見込まれたものが保護管理の対象から弾かれることで全体に偏りが生じ、寧ろ地球環境に思いもよらない悪影響を及ぼす結果とならないだろうか。これこそ内村が警鐘を鳴らした、天然に対する人間の傲慢な態度であると感じる。

内村は神による人類救済を切望し、その願いの実現を大いなる主の御業に託して、自身の行為に神の子としての責任を負った。裏を返すとこれは、自らの行動を疑い続け、神の意に背かないよう意識することである。この

⁷⁵ 2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015年に国連サミットによる全会一致で採択された国際目標。「あらゆる形態と側面の貧困を撲滅する」ことを「最大の地球規模の課題」とし、「持続可能な開発」によって、より良い世界を目指すための活動。外務省「SDGsとは？ | JAPAN SDGs Action Platform |」mofa.go.jp（最終確認：2025年1月25日）。国連広報センター（2015年）「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」国連総会，1頁。

姿勢を現代社会に落とし込んで考えてみると、もし本当に「SDGs」を実現させるならば、現在の取り組みが目的達成に適しているのかを、複合的な観点から検討する必要がある、そうではなく名ばかりのものならば張りぼての行為を続けることに何の意味があるのだろうか。

これからの未来を生きる人々のために、より良い世界を実現させたいという理念自体は、決して間違っていないと思う。重要なことは目的達成に向けて批判的精神で思考し続けることであり、そのために内村の遺した天然観は天地万物との一つの向き合い方を提唱していると結論付けたい。

[参考文献]

赤木善光（1993年）『漱石と鑑三「自然」と「天然」』教文館。

外務省「SDGsとは？ | JAPAN SDGs Action Platform |」mofa.go.jp（最終確認：2025年1月25日）。

原島正（1982年）「内村鑑三と「身体の救い」『基督教学研究』第5号、26-48頁。

原島正（2002年）「内村鑑三における「神・人・自然」『基督教学研究』第22号、39-53頁。

伊東俊太郎（2002年）『文明と自然—対立から統合へ—』刀水書房。

岩野祐介（2005年）「無教会主義キリスト教における社会正義：内村鑑三の社会正義とキリスト教思想の関連を中心に」『アジア・キリスト教・多元性』第3号、1-20頁。

岩野祐介（2013年）『無教会としての教会—内村鑑三における「個人・信仰共同体・社会」』教文館。

影山昇（1996年）『人物による水産教育の歩み—内村鑑三・寺田寅彦・田内森三郎・山本祥吉・天野慶之』成山堂書店。

環境省「環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書」<https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/r06/index.html>（最終確認：2025年1月25日）。

環境省「国連人間環境会議（ストックホルム会議：1972年）」https://www.env.go.jp/council/21kankyo-k/y210-02/ref_03.pdf（最終確認：2025年1月25日）。

川口マーン恵美、掛谷英紀、有馬純ほか（2021年）『SDGsの不都合な真実「脱炭素」が世界を救うのは嘘』宝島社。

国連広報センター（2015年）「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」国連総会。

Henry Goddard Leach (1911) , *Reclaiming the Heath-How Denmark Converted a Desert into a Farming Country*, McClure's Magazine.

百瀬宏, 熊野聰, 村井誠人編（2022年）『北欧史 上—デンマーク・ノルウェー・スウェーデン・フィンランド・アイスランド—』山川出版社。

森宏一（1995年）『哲学辞典』青木書店。

日本聖書協会（2009年）『聖書新共同訳—旧約聖書続編つき』日本聖書協会。

岡本厚（2014年）『文語訳新約聖書 詩篇付』岩波書店。

岡本厚（2015年）『文語訳旧約聖書 I 律法』岩波書店。

大山綱夫（2012年）『札幌農学校とキリスト教』EDITEX。

李慶愛（2003年）「内村鑑三における宇宙神観の展開」『比較社会文化』第9号, 147-155頁。

鈴木範久（1975年）『内村鑑三とその時代—志賀重昂との比較』日本基督教団出版局。

鈴木範久（1984年）『内村鑑三』岩波新書。

鈴木範久編（1990年）『内村鑑三選集第五巻』岩波書店。

内田芳明（1991年）『現代に生きる内村鑑三』岩波書店。

内村鑑三（1981年）『内村鑑三全集 7』岩波書店。

内村鑑三（1982年）『内村鑑三全集 3』岩波書店。

内村鑑三（1982年）『内村鑑三全集 17』岩波書店。

内村鑑三（1982年）『内村鑑三全集 28』岩波書店。

内村鑑三（1983年）『内村鑑三全集 32』岩波書店。

内村鑑三（1983年）『内村鑑三全集 35』岩波書店。

内村鑑三（2011年）『後世への最大遺物, デンマーク国の話』岩波書店。

内村鑑三（2021年）『キリスト信徒のなぐさめ』岩波書店。

内村鑑三著, 鈴木俊郎訳（1987年）『余は如何にして基督信徒となりし乎』岩波書店。

若松英輔（2018年）『内村鑑三 悲しみの使徒』岩波新書。

鷲見誠一（1970年）「内村鑑三不敬事件：その思想的考察」『潮田江次先生追悼論文集』, 291-315頁。

山本泰次郎（1962年）『内村鑑三聖書注解全集第十七巻』教文館。

山本泰次郎（1965 年）『内村鑑三聖書注解全集第一巻』教文館。

山本泰次郎（1968 年）『内村鑑三の根本問題』教文館。